

---

---

## ジョージ・ブレクトのイベント・スコアにおける解釈の揺らぎ

### ——「形式のない芸術」に向かって

伊藤良平（京都大学）

---

---

1960年代初頭、フルクサスの芸術家として知られるジョージ・ブレクト（1926 - 2008）は、イベント・スコアと呼ばれる表現手法を確立した。それはごく簡潔な言葉による指示書で、彼によれば、日常で見過ごされてしまう些細な出来事を、特異な経験へ変容させる「信号」だった。この「信号」という言葉は先行研究でも頻繁に引用されてきたが、その意味には検討の余地がある。「信号」が一義的な情報の伝達を想起させる一方、イベント・スコアは、極端に削ぎ落とされた表現ゆえに、解釈に大きな揺らぎを持つからだ。

発表者は、イベント・スコアにおける解釈の揺らぎに着目し、それが担った機能を考察する。これまで解釈の揺らぎは、大きく二つの方向から取り上げられてきた。まず、解釈過程の観点から、絶対的な解釈を措定せず読み手の自由に任せる、作者の権威の放棄として、次に、実現（リアライゼーション）の多様性の観点から、パフォーマンスや絵画、彫刻といった媒体を問わず、多様な実現を許容するポスト・メディア性の条件としてである。以上、先行研究が示す二つの見解に加え、発表者は、ブレクトが好んで用いた偶然性やパラドクスなどの手法との比較から、解釈の揺らぎが、芸術という領域から逸脱し、世界そのものへ無媒介的に漸近する方法であったことを明らかにする。

以上の目的の下、まずイベント・スコア集《ウォーター・ヤム》（1963）から、解釈の揺らぎの諸相を確認する。同作はイベント・スコアという手法を確立する1959～63年の作品を集めたものであり、改稿された複数の版も併録されている。改稿の過程からは、イベント・スコアが演者の存在を消し去り、出来事そのものへと表現の焦点を移したことで、著しい解釈の揺らぎを獲得したことが伺える。その後、ブレクトは、異質な単語の並置によって、この解釈の揺らぎをさらに増幅させることとなる。

次に、解釈の揺らぎが担う役割を考察する。ブレクトは、人為を排しあるがままの世界を現前させる契機としての偶然性や、世界の理性的把握から逸脱する契機としてのパラドクスの手法により、無媒介的な世界の経験を追求した。イベント・スコアもこの企図の下で考察されうる。1961年の覚書で、ブレクトは形式という概念を、日常の領域にある事物を芸術へ昇華させる媒介と規定し、「形式のない芸術は可能だろうか」、つまり、日常をそのものとして無媒介的に経験しうるような芸術は可能か、と自問した。ブレクトは、芸術を最小限の形式（「信号」）にまで還元し、自らそれに応えようとした。加えて解釈の揺らぎは、先述したポスト・メディア性に見られるように、形式そのものへも揺らぎをもたらすがゆえに、イベント・スコアを「形式のない芸術」へ肉薄させる。まさにこの点にこそ、イベント・スコアの解釈の揺らぎが持つ意義が存するのである。